



広島管財株式会社  
代表取締役社長

川妻 利絵

### 駿河臺の頃

はじめに、内容的に新年号に相応しくないかもしれませんが、先ずもってお許しただきたいと思えます。ただ祖父の生きざまを記した闘病記『駿河臺の頃』に触れる事にしましたのは、私にとって充分尊敬に値する存在であり、私が経営者になることを決意した大きな要因にもなったからです。

『駿河臺の頃』は、祖父が帝人東京在勤中の昭和二年から3年間敗血症を患い、東京駿河台にある三葉病院での闘病生活の様子を、昭和5年に広島へ転勤後、書かれた物で時には生々しく、時には逸話や小説のように、そして随所に支えてくださった方への感謝が書かれて

いる自伝です。

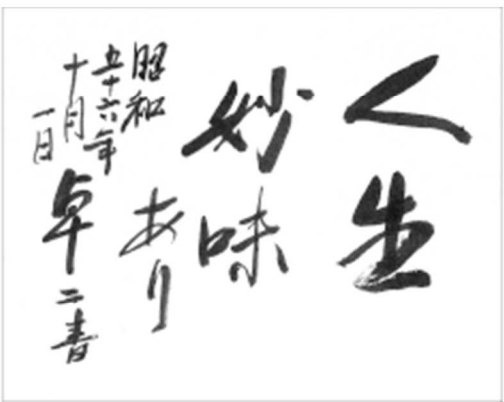
私の祖父 川妻卓二は広島市中区で次男として生まれ育ち、広大付属から早稲田大学を卒業後、鈴木商店のちの帝人へ勤めて東京の中野に妻と長女 麻布の東洋英和からのち広島女学院を卒業後、女学院で教職に就くが被爆死、長男 子供の頃は丈夫な体の持ち主であったようだが、広島管財創業後もなく肺結核で若くして病死)、次男 私父 川妻二郎である。子供の頃から気難しく親をよく困らせていたようである」と暮らしていました(親馬鹿の記より)。

当時、敗血症とは命が助からない病で、手術までの間、想像を絶する痛みと高熱続きで生死をさまよい、自分の命を助けるために脚を股から切断するという選択をしたようです。なんと全身麻酔を頼んでいたにも関わらず、局所麻酔で手術を受けることになり、その様子を克明に記しています。その後、何のわけかまりもなく、本当にさばばしたよ」と何度も書かれているのを見て、なんと強い精神力と気持ちの切り替えの素晴らしさ。想像を超える苦難を乗り越えてきたからこそ、のちに経営者として8才迄生き抜いてきた気力の源泉は、この闘病

生活からきていると確信しました。

祖父は観察力といいますが、『薬病院』という病院名の由来が孟子からきていることを事細かく調べたり、看護婦さんの白衣や頭に被るキャップについてもその当時まだ珍しく、その光景をユーモアたっぷりに表現しています。また、当時としては珍しい輸血についても書かれています。今でこそ輸血のストックがありますが、日本で初めての輸血は大正8年からだそうです。祖父も12回輸血を行い、その頃その病院での最高記録保持者であったようです。当時は苦学生たちがお金を稼ぐために献血をしていたようですが、いずれにせよその方たちのお陰で命をつなぐことができたのは確かです。

また、松葉杖の上手な使い方についても表現豊かに描かれ、私が子供のころから見えていた祖父、松葉杖を脇に挟み一本足で立ちながら、現場から戻ってきた社員一人一人を労いお給料袋を両手で手渡す姿もきくとこの頃から試行錯誤していたのだらうと想像してしまいました。私の覚えている祖父は行動範囲が広くない分、多くの書物から情報収集を行



祖父・川妻卓二 才自宅にて

い、とても物知りだったと記憶しています。のちの広島管財の仕事の中でも、全国に先駆けて広島で創めた学校警備 昭和5年(昭和19年)から平成5年(昭和30年)まで)も、祖父の情報収集で始まったことを私は何度も聞かされてきました。祖父はこの本の最後に『幸福というもの』と題して書いています。これだけの経験をしたからこそかもしれないが、幸福とは、おと目の前を掠めてゆく鳥影のようなもの」手術後口にした味噌汁が身に沁みて旨いと言った瞬間」、またある時は美味いコーヒーをゆっくり味わっているその時幸福という瞬間を覗き見た」と記しています。日常の何気ないなかに幸福はあるのかもしれない。

元来、文章を書くことが好きであった祖父は、社員へ宛てた『壱山の石』という社内報も書いていました。自分が大病をした経験からか、いつも3年先の分まで書いていたようです。私は経営者になるかどうか悩んだ時期に、これらの書物すべてに目を通しました。孫という立場から見ている祖父は背も高く、いつもズ

ボンの片方をベルトに通してきれいに折りたたんだ状態でビシッと格好よくスーツを着こなす、洋食とワインが好きなハイカラな人でした。そんな華やかな面しか知らなかった祖父の別の一面をこれらの書物から知った私は、祖父が興じた広島物産(昭和5年)と広島管財を何としてでも引き継がねばと強く思いました。当時専業主婦であった私に何ができるのかは分かりませんでした。同じDNAが流れていてそのバトンを受け継がなければと強く感じました。私はまだまだ修行が足りていませんが、祖父の底知れぬ強さと人一倍感謝する心、そしてどんな時でもプラスに捉える精神力。私もそれらを少しでも持ち合わせていれたいと思います。私の人生の師であり、大好きな祖父です。この度このように振り返る良い機会を与えて頂きまし事に感謝いたします。

最後に祖父の座右の銘 『天生妙味あり』  
私の人生も妙味を味わいながら生きていきたいと思います。